

ライフ・アクアティック

2005(平成17)年4月14日鑑賞(東映試写室)

★★★★



監督=ウェス・アンダーソン/出演=ビル・マーレイ/アンジェリカ・ヒューストン/オーウェン・ウィルソン/ケイト・ブランシェット/ウィレム・デフォー/ジェフ・ゴールドブラム/セウ・ジョルジ (ブエナ・ビスタ・インターナショナル<ジャパン> 配給/2004年アメリカ映画/118分)

……主人公は海洋学者、冒険家にしてドキュメンタリー映画の監督。海底を探検中、チームの一員が体長10メートルのまだら模様のあるジャガーザメに食われてしまった。さあ大変！ そこでチームは……？ 主人公もちょっと変わり者の中年男なら、その周囲に集まるのも変わり者……？ タイトルからイメージされるとおりの「海の生活」を描いたものだが、ちょっとワケのわからない不思議な映画。「練りに練った脚本」と言えなくもないが、さて……？

『「ジャガーザメ」パート1』の上映は？

この映画の主人公スティーヴ・ズイスー（ビル・マーレイ）は海洋学者にして冒険家でありドキュメンタリー映画の監督。そしてまたそのスティーヴは「チーム・ズイスー」のリーダーだ。今夜のロカスト映画祭で上映されるのは、スティーヴが監督した新作ドキュメント映画である、『水中の生活 探検 第12話「ジャガーザメ」パート1』というもの。ところがその映画では、チームの1人が、体長10メートルで背中にまだら模様のあるジャガーザメ(?)に食われてしまうという悲劇に。そのため(?)上映後の質疑は盛り上がりせず、かなり冷めた雰囲気。しかもジャガーザメの映像がなかったことに観客から不満の声も。ところがスティーヴは、淡々と観客に対してそのにつくきジャガーザメ探しとそれに対するリベンジ(復讐)を誓い、次の探検の旅に出ることを明らかに……。

変人のオンパレード……？

この映画の主人公スティーヴは愛嬌のあるかわいらしい顔をした中年男。もちろんその地位にふさわしい能力は備えているのだろうが、その行動を見ているとかなりわがままで、乱暴、そして状況判断に欠けるところがある。チームのメンバーに対してもそうだし、実習生に対してもそう。そのアンバランスぶりが端的にあらわれるのは、天敵ともいえるアリスティア・ヘネシー（ジェフ・ゴールドブラム）の海洋研究所に侵入して、ハイテクの追跡システムからエスプレッソシステムまで平気で盗んだり、海賊に襲われた時に見せる何とも思いつきで無茶苦茶な対応……？ こりゃ、かなりの変人……？

周辺の人物もかなりの変人

準主役ともいべき2人の登場人物も負けず劣らずかなりの変人。その1人は、突然「俺はあんたの息子だよ」と名乗り出てきたネッド・プリンプトン（オーウェン・ウィルソン）。この父子関係(?)のあり方がこの映画の1つの見どころだ。もう1人は「チーム・ズイス」を取材するため、探査船ベラフォンテ号に乗り込んできた、現在妊娠中の雑誌記者のジェーン（ケイト・ブランシェット）。『アビエイター』（04年）では見事にアカデミー賞最優秀助演女優賞を獲得した演技力抜群の大女優だが、この映画での魅力は今ひとつ……？

「練りに練った脚本」とは？

パンフレットは、この映画の面白さを、「家族、そして拡大家族をテーマにした、練りに練った脚本」と表現している。「練りに練った脚本」といえることはたしか。しかし前述のように、主人公をはじめ登場してくる人物が変人ばかりであるうえ、やることなすこともすべて変なことばかりの脚本をそのように表現すべきかどうかは……？

この脚本では、ややこしい人間模様の展開は、今はやりの表現を借りれば、「すべて想定範囲内！」ということか……？

ベラフォンテ号の断面セットは？

「チーム・ズィサー」が乗り込むベラフォンテ号はもちろんホンモノの船で海に浮かんでいるものだが、「練りに練った脚本」の1つの効果として(?)、その断面セットが登場する。これは、建物の設計図を見るのが大好きで、今まで事務所や自宅の部屋のレイアウトをすべて自分1人の力でやってきた私には、非常に興味のあるもの。サウナ室を備えているのは私の好みと完全に一致。しかし乗組員の動線の理想形からすると、そのレイアウトの合理性は今ひとつ……と思えてならないが……？

幻想的な海洋生物たちは？

この映画のもう1つの「売り」は、「幻想的な架空の海洋生物たちは、ヘンリー・セリックの古風な神業で生き生きと動く」ということ。たしかにいくつかのシーンに登場する、「クレオンタツノオトシゴ」「ベトコンクラゲ」「キャンディガニ」等の姿は色鮮やかで美しく愛嬌のあるもので、悪くはない。しかしそれを見て特に感動するというほどでは……？

しかも、この映画のテーマである「体長10メートルで背中にまだら模様がある、ジャガーザメ」とは？ 最後に見ることができるその巨大な姿はたしかにもの珍しく美しいものだが、さてそれをあなたはどう評価する……？

音楽の出来は……？

この映画では、「チーム・ズィサー」の1人で、事故防止の専門家であるペレ・ドス・サントス(セウ・ジョルジ)が、本業ではなく(?)ギターを弾き語り役として再三登場する。パンフレットによれば、デヴィッド・ボウイの名曲の数々をポルトガル語でボサ・ノヴァ調にカバーしているとのことだが、残念ながら私にはこれがサッパリわからない。その1つ1つもたしかに名曲なのかもしれないが、日本人にはなじみの薄いもの。したがって日本語訳の歌詞も出ない以上、わかりっこないのは当然。果たしてこれは、この映画に登場する音楽について知識のない私の八つ当たりなのだろうか……？

2005(平成17)年4月15日記